

---

# 冬の向日葵

桜桃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冬の向日葵

### 【ZINEアーティスト】

Z0689Y

### 【作者名】

桜桃

### 【あらすじ】

「わかつてほしいのは貴方だけ。  
隣に居てほしいのも貴方だけ。」

願い事は一つ。

彼の傍に居たい。

「なあ、灰原。」

「何よ。」

「え、いや・・・起きるのか?」

朝、学校に来たコナンは隣の窓に話しかける。

「別に。どうして?」

「いや、元気でねよう見えてからよ・・・」

「もともとこの顔なのよ。」

「奴を懲らしたなら・・・」めんなさいっ?。

「べ、別にやうござんじや・・・」

もつと怒りせたかと焦るコナン。

「私なんかにかまつてないで、彼女を元気付ける方法」を考えれば？

最近また、泣かせてるやつじゃない？」

「そ、そりだな・・・」

「電話をしてみるとか、いろいろあるでしょ。」

乱暴に教科書を置いていく。

「哀ちゃん、どうしたの？」

「あ・・・別に、なんでもないわよ。」

「すっげー変わつよ・・・・・」

「何か言つたかしら？」

「何も言つてしません。」

「そう。」

「コナン君と哀ちゃん、何はなしてたの？」

「他愛のない話ですよ。」

「ふうん。」

歩美は人差し指を頬にあてて、?マークを浮かべた。

## Sun Flower · part1 (後書き)

やあつと書ける日がきました！

mineさんのからのリクエスト小説です。

蘭と哀の恋のバトル！！

どうなるのじゃつか？

これからも宜しくお願ひします

「　「　「お・ん・せん!お・ん・せん!」」

歩美、元太、光彦の3人は嬉しそうにはしゃいでいた。

ここは阿笠邸の前。

「それにしても・・・博士と灰原さん、遅いですね・・・。」

「ちょっと待つてって、15分前に言つたきりだよね。」

「腹でも壊してんじゃないの?」

「・・・元太君じゃないんですから・・・。」

「ま、取り合えず寒いから博士ん家で待つてよーぜ。」

「賛成!ー!」

\* \* \* \* \*

「はーかせ~まだあ~？」

「まちくだびれてしまつましたよ。」

「俺なんか腹減つちまつたぜ~」

「なこにせんじやんだよ。」

「すまんすまん。昨日のつけに準備してなくてな・・・」

「だから言つたじやない。  
もう準備したの?って。つたく・・・。」

「ははは・・・。」

もつ吐笑こするしかない。

「仕方ねえ・・・俺達も手伝うぜ。」

卷之三

「盐でやつたらすぐ終るもん。」

「ナニ、アガマ？」

「一九四〇年」

何に対してもハイテンションな3人に

小さく笑う。

「そりいえば・・・彼女に電話してあげたの？」

「え？ あ、 ああ ・・・・・まあな。」

ズキンツ

「あ、う・・・」

「・・・? 何か、怒つてねえか?」

「氣のせこよ。」

「?」

「せひ、 もうあとこれ運んでくれる?  
じやなこと口が暮れるわよ。」

やつまご放つと娘はスタスターと柴を出した。

「・・・なんだあ?」

コナンの頭の中はマークでいっぱいだった。



「やつと出発だねー。」

「楽しみですー。」

「たっくさんのお土産買つてかなきゃなー。」

「食べ過ぎるなよ、元太。」

「わ、わかってる。・。・。・。」

「・。・。・。どうかの誰かさんも、あんまりのうけないでよ。」

「はあ？それって、俺の「とかよ。」

「さあね。」

哀は静かに窓の外を眺めた。



## Sun Flower · part2 (後書き)

文化の日・・・は

部活の打ち上げ会です

部活が終わってそのままドンキへ直行なのですが・・・。

声がない・・・！

明日は部活、見学だわ・・・。

「やあっといけるね 温泉。」

「ほんとですね。」

「つたく博士、準備にどんだけかかってんだよ。」

「まあ、今度からは灰原の言つとおり  
前の日から準備しとくんだな、博士。」

少年探偵団の言葉に博士は苦笑い。

「ふああ・・ほんとなもつと寝ときたいのに  
博士にたたき起しだされた私の身にもなつてほしいものね。」

「すまんのあ、哀君。」

「私、寝てるから着いたら起しつけて。」

助手席に座る哀が冷たく言い放つ。

「おい、博士。

灰原、いつもに増して機嫌悪くねえか？」

「わしが起こしてしまったからだろ？」「

「いや、最近ずっとなんだよなー・・・」

「ちゅうど、聞こえてるわよ。」「

「え、。」「

哀はジロッとコナンを睨んだ。

「私の機嫌が悪かろ？とそうでなかろ？と貴方には関係のないことでしょ？」

「あ、ああ・・・そうだな。」「

ナンと博士は田を点にするしかなかつた。

キキツ

「わあ・・・温泉、だね！」

「ええ・・・温泉、ですね！」

「お・・・・温泉、だな！」

瞳を輝かせる。

「おい、灰原。着いたぞ。」

「ん・・そう。」

力チャツ

「綺麗な旅館ですね。」

「温泉にはいるの、楽しみ〜〜！」

「俺たちの部屋、どうだよーーー。」

「これこれ・・・」

「おい、走るなって。・・・女王様が怒るわ。」

後ろで腕を組み、睨む哀の姿を見て口ナシはつぶやいた。

「女王様って、私のことかしら。」

「他に誰がいるっていうんだよ。」

「じゃあ・・・女王様の荷物、持つてくれない?」

「俺が?」

「他に誰がいるっていうのよ。」

哀はコナンに荷物を差し出す。

「はあ・・・」

「落とさないでよね。」

「女王様の大切な荷物なんだから。」

「へいへい。」

「あれー」ナンくん、何で喪ちやんの荷物持つてるの?」

「お願いだからここに触れないでくれ。」

「?」

あつちーじゅぢに転々として元太と光彦は叫んだ。

「 いじうらがお部屋で、じやります。」

「 いじのお部屋、ヒトイリギツヒミツひんだ。」

「 あやに今の時期にぴったりね。」

「 いじのお部屋は柊の花がよく見えるんですよ。  
今は冬ですから。」

ヒジリと笑って説明してくれた。

「 いじわらは紅葉だつてよー。」

「 いじわらは桜ですー。」

「そこのお部屋は秋になると紅葉が綺麗に見えるんです。  
そして、そこのお部屋は春になると桜が満開に咲くんですよ。」

「へえ・・・それ見える花の名前を部屋に割り振つてるわけね。」

「

「なんだか口マソティック。」

「・・・重い。」

「あなたね、感動しているそばからそんなこと言わないでくれる?  
崩れるわ。」

「あんなあ、おもてーんだよこれー。」

「あら、私女王様なんですよ?」

「女王様にそんな重たいものを持たせる気?」

「・・・お前、女王様って言つたの、気にしてるのか?」

「別に。」

「ナンは田が点になり、哀は睨んでいる。」

「 ああ、さうや。」

中へと入っていった。

S u n   F l o w e r . p a r t 3 ( 後書き )

遅くなつてすみません！！

次回もまた、宜しくお願いします！！

「わあ、ひうーいー！」

「部屋がたくさんあります！」

おこ、ひつち来いよ……風呂場も広いぜー。」

「わあ、早くお風呂入れようよ！」

「おーおー・・・風呂せんじやなくて・・・」

「あ、そっか！」

「「「大浴場！」」」

3人はおおはしゃぎ。

「どうするへ博士。

先に風呂に入るか?」

「わしはどちらでもかまわんが・・・」

「ねえ、先に入っちゃおうよ!」

「そうですね。」

「俺もう入る気満々だぜ!」

「んじゃあ、今から一時間後でここに来て夕飯にしてや。」

「行く、袁ちゃん。」

「悪いけど、私はバス。」

「おーおー・・・お前口元きしまで雰囲気ぶち壊すなよな。」

「うるさいわね、疲れてるのよ。」

「お風呂なら私が好きなときに入るから。」

吉田さん、「ごめんなさいね。」

「あ・・・ううん。気にしないで。」

じや、元太君、光彦君、行こう?」

「おおー!」

「はい。」

3人で仲良く歩くところを見送る。

「・・・灰原、オメー何怒つてんだよ。」

「別に。」

「うそつけ。顔が怒ってるのバレバレ。」

「私はもともとこういう顔なのよ。」

「大体、風呂くらい一緒に入ってやれよな・・・歩美ちゃん、完全に作り笑いしてたぞ。お前にだってわかつてたんだろう？」

「・・・」

「何で怒つてんのかしらねえけど  
夕飯はちゃんとカルシウムとつておけよ?」

コナンは少しあいだを残すと部屋をあとにした。

「はあ・・・ったく、本当に女心をわかつてないのね。  
あれでちゃんと探偵が務まってるのが怖いわ。」

哀は桜の花を見つめながら少しひぶやいた。

S u n   F l o w e r · p a r t 4 (後書き)

次回もよろしくです！！

「はー、気持ちよかつた  
あれー、哀ちゃん何読んでるの?」

「え? ああ・・・科学者の苦悶。つていつ  
ゾクゾクしちゃうよな話よ。」「

「へえ。  
終わったら歩美にも見せて!」

「いいけど・・・死体とか殺しとか・・・  
あるし、漢字も沢山あるから読めないわよ?」

「やうなんだ・・・歩美には無理そうだね。」

やう言つて笑顔を向ける。

「吉田さん、一緒に入んなくて・・・怒つてる?」

「え? なんでー?」

そりや、ちょっと悲しかったけど・・・でも、哀ちゃんが入りたくないって言つてるんだもん無理には誘えないでしょ?」

「吉田さん・・・」

「あ、ねえー哀ちゃん、柊の花が月の光で輝いてるー。宝石みたいー。綺麗だね!」

「ええ・・・」

「へえ、じー、柊だけじゃなく月も綺麗に見えるんだな。」

「わっ!コナン君ー!ビックリした・・・」

「貴方ね・・・人間なら人間らしく物音くらに立てなさこよ。ビックリするじゃない・・・」

「わりーわりー。」

悪そうに詭びないコナンに哀はため息を漏らした。

「そろそろ夕飯の準備しに来るんじゃない？」

「え？ ここってバイキングとかじゃないの？」

「ああ・・・ここは旅館だからここの人気が持ってきてくれんだよ。指定の時間にな。」

「へえ。」

「はいはい・・・探偵さんは何でも知つていいわね？」

「あのなあ・・・嫌味にしか聞こえねえんだけど。」

「別に。」

「まあ・・・ちなみにこの引き戸をひいてみると・・・」

「わあ・・・！」

「綺麗な天女の絵が飾られてるんだぜ。」

「それさ、ジグソーパズルで、ここのお嬢さんの趣味らしいんだ。あまりにも作りすぎたらしくて一部屋一部屋に飾ってるんだぜ。確か・・・サクラの部屋は女神。スミレの部屋は天使。ヒマワリの部屋はつばさ。コスモスの部屋は妖精。つと・・・こんな具合に。」

「・・・かなり詳しいのね。」

「ああ・・・前にここで殺人事件があつて・・・」

「殺人事件つて・・・」

「大丈夫、現場はもう使われてないからよ!」

「そういう意味じゃないわよ・・・つたく。  
それより、小嶋君たちは?」

「ああ・・・まだ入つてるぜ。  
遅いから先にあがつてきたんだ。」

「ふーん。」

ダダダダダダダッ

バンッ

「元太、少し静かに・・つて光彦かよ。」

「た、大変です！」

光彦の後ろから元太が息を切らしてやつてくる。

「た、大変だ！」

「どうしたの？」

「殺人事件か！？」

「・・・なんで嬉しそうなのよ。

人が殺されることがそんなに嬉しいの？」

「そうじゃなくて・・・

最近事件がご無沙汰だったから・・・  
謎解きしてーな、って思つてて・・・

「だつたら、なぞなぞでも解いてなさいよ。」

「あれは簡単やんなんだよー。」

「だつたら難しきのやればこいどしよー。」

「ヤーじゃなくてー。」

「どひでもここんでやるよ、そんなのーー。」

「とつあえず・・・僕にこいつをだせーー。」

「へー。」

とつあえず、光彦につっこむべくとこなつた。

さて・・・

殺人事件、なのでしょうか？

それとも・・・。

「おい、光彦。

一体何があつたんだよ。」

「あの人、見てください！！」

指をさす方向を見る。

腰まであるだらつ長い黒髪はゆるくカールされている。

真っ白な肌にうつすらと頬はピンク。

薄い唇。

世間では一般的に「美人」の分類に入る

1人の女が周りにちやほやされながら笑っている。

「あの人はどうかしたか？」

「なんか、女将さんとか手懐けてるけど…。  
どつかの令嬢なのがしら？」

「いえ、違いますよー！」

「じゃあ、誰なの？あの人。」

「新一さんの恋人らしいんですよ！」



「 「はあーーっ。」

コナンと哀は同時に声を出す。

「ちょっと、工藤君。

貴方いつの間にあんな人に出会ったのよ。」

「しらねえよ。

第一、名前も知らないんだからよー。」

「だったら何で名乗ってるのよ。彼女だつて。」

「だーかーら、しらねえよー！

大体、新一なんて珍しい名前じゃねえだろ。」

「あのー、『ナン君、灰原さん……  
僕の話し、聞いてますか?』

「あ、わり……」

「で・・・彼女は高校生探偵の工藤新一の彼女だつて  
言つてるの?」

「はい。何でも新一さんがここで起きた殺人事件を解決したらしく  
て・・・

「この旅館の人結構新一さんに恩を感じてるそなんですよ。」

「だから、彼の恋人だというだけであんなにちやほやとされてるの  
ね。」

「はい。」

「でもさー、新一お兄さんの恋人って蘭お姉さんでしょ?」

「二股なんじやねえか?」

「ひどいですね、それは。

男の風上にもおけません!女性の敵です!—

「おーおー・・・

「まあまあ・・・私の見たところ。  
彼女は偽者ね。」

「え？ 偽者？」

田を丸くする歩美。

「ええ。

でしょ？『江戸川君』？」

「・・・。ああ、新一兄ちゃんは|股するよ!|の男じゃないよ。  
それに・・・」

「それに？」

「う、蘭姉ちゃんの」と以外はが、眼中にないと・・・  
思ひ・・・」

ズキンッ

真っ赤になりながら答えたコナンの姿と

言葉に赤はとまどいを隠せないでいた。

「そつかー、そうだよねえ。」

「じゃあ、何の人・・・そんなうそついてるんでしょう・・・」

「金でも貰うつていう魂胆じゃねえか?」

「そりでしょつか・・・」

「ま、嘘なんてすぐバレるものよ。

本人がそれで気がすむのならいいじゃない。

ほつときなさいよ。」

「だけど・・・」

「ま、ここは灰原の言つとおりほつとけ。

そのうち本人も飽きるだろ。」

納得できない様子の3人を置いて再び歩き出す2人。

「そりいえば、博士びついた?」

「ああ、博士ならまだ入つてますよ。」

「はあ？いい加減のぼせるぞ？」

「つていうか、夕飯に間に合わないわよ。」

「だ、だよな・・・」

「僕、呼んで来ます。先に戻つてください。」

「あー、じゃあ、よろしくな、光彦。」

「はい。」

まさかの偽者？

いやあ、これ・・・  
ある少女漫画にあつたんですね。  
偽者を偽つた美しい女性が居て・・・  
でも本物はただの子供みたいな対して美しくもない女の子。  
その子は自分が本物だって言つんですけど信じてもらえないんですね。

そこで考えたのが・・・

『新一の彼女だって嘘つくなつがいたら・・・？』

でした。

これにどう対処するのかも自分としては楽しみで  
書きたかったんですよね。  
3年越しの夢でした・・・。

「ふあああ、良くなあ。

おはよ、「ナンくん。」

「おはよ・・・・

あ、灰原どこ行つてたんだよ。

こんな早くに・・・まだ7時前だぞ?」

「別に・・・

ただ頭を冷やしてただけ。」

「ふーん・・・・

「それより、ほんとこいつの?..」

「え?」

「昨日の、H藤君の彼女氣取りの?..」

「ああ・・・いいたい奴には言わせとけばいって  
昨日も言つただろ?」

「どうやら、そういう状態じゃなれりつよ。」

「はあ？」

喪の言葉にコナンは苦笑いつて聞く。

「結構調子に乗つてゐるみたい。」

「いいんじやねーの？』

それで気分が良くなるんだつたひ。

「・・・お金、取つてゐるのよ。」

「は？」

「ここで事件を解決して、

あなた、少しでも報酬を貰つた？』

「いや・・・まだ高校生だし・・・  
いくら事件を解決したとしても、貰つてねえよ。  
全部断つた。』

「でしょ？ね・・・

だから、その彼女が・・・そのときの報酬を貰つてゐるのよ。』

「貰つてる？」

「ええ。

もう女王様気取りつたらなんの・・・廊下ですれ違つたときなんか、頭を下げなかつたって突き飛ばされたのよ。

つたく・・・何様つて感じよね。」

「突き飛ばすつて・・・」

「一步間違えたら暴行罪よ、あの人。」

静かに怒りをぶつけていく。

「で?いいの?

あのままだと貴方の評判・・・

ガタ落ちよ。

さつきだつて従業員の人が呟いてたわよ。  
あんな女を彼女にしてる工藤新一の  
気心が知れない・・・つてね。」

「はは・・・」

「笑つてる場合じゃないわよ。  
大体、彼女だと偽つてお金を貰うなんて・・・  
貴方の一番大嫌いな・・・犯罪なんじやないの?」

意味ありげな表情で哀はコナンを見た。

「行くか……」

「どこに行くの？」

「え？ いや……」

「昨日の、上藤君の彼女だと偽つてた人に  
一言……言つてくるのよ。」

「そりなんですか！？」

「俺たちもいくぜ！！」

「おいおい……灰原、おめーが余計なこと言つから……」

「あら、一人より大勢のほうが心強いでしょ？」

「……はあ。」



「ちよつと、この『シップ』割れてたんだけど…」

「す、すみません！」

「つたぐ、謝罪だけじゃたりないわよ。  
そうねえ・・・一万、で許してあげる。」

「そんな・・・お金どるんですか?

「お詫びでございます」

「うわあ、やったー！」喜んで叫ぶアーニー

あんたは言うこと聞いてればいいのよ。  
あたしは工藤新一の彼女よ！？

そんなあたしに逆らつていいこと黙つてんのー?  
恩を仇で返さないでよー!」

「す、すみません・・・」

「ずいぶん言いたい放題ね。  
しかも、かなり荒い性格・・・」

「あの人、報酬貰つてたんだ・・・」

「コップが割れてるだけで一万だつてよー!  
高け~よなあ。」

「それに、宿泊代をタダで要求してゐみたいですし・・・  
許せませんね。」

「おねーさん。」

「なに?」

話しかけてきた歩美にすこい形相で睨みつける。

「なんか用?

工藤くんなら居ないわよ。

彼は今、事件でいないの。」

「あひ、ちやんと調べてるみたいね。」

「おこおこ・・・」

「それで?何の用なのよ。」

「ちょっと聞きたい」とがあつただけなのよ。  
貴方と工藤新一の出会い・・・とか。

あの有名な高校生探偵との出会いを聞きたくて。」

「あら・・・

なんだそんなこと。

別にいいわよ。そななことなら。」

以外にあつせりと承諾してきた。

そして、すぐ近くの休憩所に腰を下ろす。

「体のライン・・・蘭さんといい戦いね。」

「ど！」見てんだよ、おめーは・・・」

「それで・・・どから話しましょうか？」

「やうね。彼とどいで出合つたからでお願いするわ。」

哀は楽しそうに微笑みかけた。

偽彼女 . .

果たして彼女は何者!?

「そうね……彼とは高校が同じなのよ。」

「へえ……」

「最初は私の片思い。  
でも、図書室で何回か会つようになつてね……  
ある日、突然キスされたの。  
それからよ、私たちの付き合いは……」

「付き合つて何年目なのかしら?」

「高一のときからだから……1年くらいかしら。」

「つて言つてるけど……知り合いで?」

「じりねえよ。

多分、学校 자체違うと思ひ。」

「ふうん……」

「貴方の名前は？」

「新垣亞理紗よ。  
にいがきあつさ

「亞理紗・・・  
ねえ、知ってる？」

「だから、しらねえって言ひたんだろ？」

「やう。」

「で？後は何を聞きたいの？」

「彼の両親とは仲がいいの？」

「両親？ええ。仲いいわよ。

彼より私を気に入ってくれるくらいにね。」

「ずいぶん、下調べされてるみたいね。  
彼より気に入られてるですか？」

「はは・・・」

「彼は今もサッカーを続けるのかしら？」

「ええ。部活と勉強と探偵・・・」

両立が大変だつていつとも言つてたわよ。」

得意げに話す亜理紗に哀はクスッと笑みを浮かべる。

「何がおかしいの？」

「別に・・・  
ただ、そこまで嘘を突き通せるなんて・・・  
すごいと関心してただけよ。」

「嘘つてね・・・」

亜理紗がグッと拳に入れたとき

「あれ?」

突然声が聞こえてきた。

「事件?」

「事件ないねえもんだったよー。すでに・・・

「蘭お姉さんー。」

(悪かったな・・・)

「だつて、この子がこるといつも事件に遭遇するんだもんー。」

「う、蘭お姉ちゃんー。ビーハーバー。」

「・・・あ、眼鏡のガキンチヨーなんで居るのよー。」

「ちよっと、園子・・・  
そんな言い方はないでしょ?」

「ああー！とんでもない大事件だー！」

「何があつたの？」

「あの人、新一お兄さんの彼女さんだつて言つてるのー。」

蘭と園子の田線は歩美の指差す方向へと変わる。

「誰？あの人・・・」

「新垣亜理紗・・・帝丹高校2年生・・・らしいわ。」

「蘭さん、園子さん、あの人を知つてますかー？」

「  
「・・・  
知らない。  
」  
」

「驚いてるみたいだけど……」の2人。  
帝丹高校の生徒なのよ。

しかも……工藤新一の知り合い。」

「えー？」

「とくにこの黒髪の蘭お姉さんは新一お兄さんの恋人なんだから!」

「なんで恋人だと偽っていたか知りませんけど……  
貴方がやっていることは犯罪です!」

「俺たち少年探偵団に嘘つくななんて  
げん！」どうだんだ！」

「……元太くん、それを言つなり『『ん』どうだん』です。」

「あれ?…そうだっけ……」

「ちなみに、工藤君はもう部活やってないわよ。」

ねえ？蘭さん・・・

「え？

う、うん・・・新一は、サッカーは探偵をやるために体力づくり・  
・

つて言つて2年のときにはもうやめたの。」

「彼女は工藤君と幼馴染・・

貴方が偽恋人だと言つことはもうわかつてゐるよ。」

クツと口惜しそうに唇をかみ締める亞理紗。

「ね、ねえ・・・『ナン君。  
話が見えないんだけど・・・どうこういふこと?』

「ああ・・・あの人、新一兄ちゃんの恋人だつて偽つてたんだ。  
新一兄ちゃんこの旅館で起きた殺人事件を解決したことを  
蘭姉ちゃん、知つてるよね？」

「うん。」

「そのことのお礼をあの人があんだけつて  
しかも宿泊代もタダにしてもらつていたみたいなんだ。」

「なにそれー、許せない！」

声を出したのは園子だった。

「新一君の恋人は蘭なのよ！」

「だ、だから・・・私と新一は何も・・・」

「何言つてんのよ、あんた新一君に生口白されたじゃない！」

ズキンッ

哀の心に何かが突き刺さる。

「新一君は蘭以外興味ないこと・・・  
帝丹高校教員合わせて賭けてもいいわよー。」

「園子ー！」

「・・・いい？

貴方のやつていたことは犯罪なのよ。  
謝つて許される問題じやないわ。」

「やつだよー」

「やつだー」

「罪はやせると償わなければなりませんー。」

「・・・」

じまへ、亞理紗はその場で黙っていた。

S u n   F l o w e r · p a r t 8 (後書き)

まさかの蘭、園子登場！

旅行だつたのかな？？？

おいおい・・・

「それより、何で蘭姉ちゃんたちがココにいるの?..」

「前、言つてたじゃない。

学力テストが終わつたら園子と温泉に行つてくれる。って。

(そういへん、そんなこと言つてたな・・)

「へえ。」

「コナン君たちほつ帰るの?..」

「今日だよ。」

「じゃあ、私たちと一緒にだね。  
ねえ、園子。」

「え？ あ、うん・・・」

「どうかした？」

「運転手に迎えよこしてたんだけど・・・急にいけなくなちゃつたらしいのよ。」

「ええ？」

「じゃあ、バスで帰る？」

「いいい、結構山奥だからバスなんてそうそそう通らないよ？  
さつき、元太たちと山を歩いててバス停見たけど・・・  
あと5時間はバス来ないし・・・」

「つそ、マジで？」

「信じらんない。」と園子はもうす。

「博士の車に乗ればいいんじゃない？」

「もうじりりよー。」

「おいおい、人数オーバーじゃよ。」

「大丈夫！」

歩美はにっこりと笑つた。

「大丈夫って……これかよ。」

運転席には博士。

助手席には哀と歩美。

そして左から蘭、園子、元太……

コナンと光彦は蘭と園子のひざの上にいた。

「うん。

だって、コナン君と光彦君は軽いからのっても平氣でしょ？  
元太君がおひざのつたら骨が折れちゃうもん。」

「・・・」

「しかし、こんなところを警察に見られたら  
つかまってしまうぞ・・・」

「大丈夫よ。

例の通り魔でこっち方面に警察はあまり居ないから。」

哀は静かに言い放つ。

「あ、哀ちゃん・・・何か怒ってる？」

「別に。」

「おい、灰原。

気分が悪いんだつたら窓開けたほうが・・・」

「向でもなこひて麻うてしも？」

「あ、そつか……？」

「えひせん、こわい……。」

「わあ、海だあ……」

「綺麗ですね。」

「青だぜ、青……。」

窓こへぱつゝようひに覗き込んだ。

「博士、海に行きたい、海……。」

「海つてな・・・今何円だと思つてんだよ。  
風邪引くや？」

「だつてー。」

「あら、ここんじやないの？

眺めるへりい。別に泳ぐわナジやないんだから。」

袴の面葉に田を輝かせる3人。

海の寄ることになつた。



S u n   F l o w e r · p a r t 9 (後書き)

さてさて・・・

次回も宜しくお願いします！（結局これ・・・

「わあ、さむーい！」

「でも、気持ちいいですねえ。」

「疲れなんか吹き飛んじまつぜー。」

「・・・元太君の疲れってなんですか・・・？」

「逆に」ひがが疲れちやつてゐるみね。」

「ひ、ひるせーー！」

「子供は元氣でいいね～？」

「あら、貴方だって今や子供なのよ？」

「んなこと聞いたらオメーだってそうだろ。」

「そうね・・・でも私はそりこいつの遠慮しつづから。」

しあわと聞このけぬ。

「そういや・・・あの新疆亞理紗つてやつ・・・  
結局どうしたんだろ?」

「さあ?

蘭さんは警察沙汰にはしないほうが良いって  
言つもんだから何もしてないけど。」

「だよな・・・」

「宿泊代タダつていつも帳消し。  
報酬も返したらしいから一先ず一件落着。よね?」

「だと・・・思つ。」

「何よ、ハッキリしないわね。」

「いや・・・

なんかいやな予感がすんだよな・・・」

「・・・貴方の勘つて意外と当たるから嫌なのよね。」

「嫌つてなんだよ・・・

当たらないより、当たるほうがいいだろ。」

「そうだけど・・・  
そんな不吉な勘なら当たらぬほうがいいに決まってるでしょ？」

「ま、とにかく俺あいつら心配だからついてる。  
お前は・・・蘭たちのところ居てくれ。」

ズキッ

「・・・なによ、人の気も知らないで・・・」

「キャラー！」

「何するんですかーーー？」

「歩美を離せー。」

「おこ、どうしたー？・・・」

歩美を抱きかかえていたのはあの、新垣亞理紗。

「おまのよつなとじる。」

亞理紗は、今にも歩美を落とすつもりで。

「あんた達があんな」としなけりや・・・」

「大体はあなたの所為だろー？」

「うるさいー。」

「歩美ー。」

「歩美ちゃんー！」

スローモーションのよひに歩美は突き飛ばされる。

コナンはとっさに歩美の腕を強く引っ張った。

その反動で今度はコナン自らが犠牲となつた。

ドサッ

「大丈夫ですかー!? 歩美ちゃんーー！」

「歩美は大丈夫・・・でも、コナンくんが・・・！」

ザバーンッ

『ナホンヘン』

Sun Flower · part 10 (後書き)

れて・・・

海に落ちてしまつたコナン。

風邪引いてしまつますね・・・。

そういう問題じゃない気が・・・

「どうしたのー?」

歩美の声を聞いた4人が駆けつけてくる。

「『』このお姉さんが……」

「歩美ちゃんを突き落とすとして……」

「やしたら、『』が……『』が……」

「え?」

「『』くんが、歩美の変わりに落ちちゃった……」

哀はただ、驚くばかりだつた。

「・・・園子、その亞理紗さんって人・・・  
捕まえておいて。」

「うん。」

蘭はどうするの？」

蘭はコートを脱ぎ捨てる。

「まさか……」

「大丈夫、安心して。」

「蘭！らん！」

蘭は高い崖から飛び降りた。

「蘭の姉ちえーーー。」

「とにかく、トコロつるさじゅーーー。」

「・・・新垣亜理紗さん。

貴方、場合によつては殺人罪よ。」

「うう・・・うう」

「・・・何泣いてるのよ。

貴方が泣く場合じやないでしょ？」

「あ、哀ちゃん・・・」

「」これで江戸川君はおろか、蘭さんまで死んでしまつたらどうする  
のよ。

貴方、責任取れるの?」

「「」ぬ・・・」」ぬんなさい・・・」

「謝つてすむ問題じやないのよ。

良くても殺人未遂よ、貴方。

・・・博士、今から警察を呼んでちょうだい。」

「え? し、しかし・・・」

「彼女に情けは無用よ。」

「あ、哀ちゃん少し、言こあれ・・・」

「言いすき？」

「これで2人が死んだら言い過ぎも何もないでしょ？」

今の哀に勝てるものなど誰一人居ない。

「あ、蘭お姉さんだ！！」

「うあん！！」

「園子・・・心配かけてゴメンね。」

ずぶぬれの蘭に園子はコートを被せる。

「コナンくんは・・・？」

「大丈夫だと・・・思うんだけど。」

「・・・大丈夫なんかじゃないわよ。」

「え？」

「かなり水を飲んでるみたい。」

息もしてないし・・・」のままじゅ、やがてわよ。

「えー?」

蘭はすぐさまコナンを寝そべらせた。

「コナン君ー? コナン君ー?」

「・・・人工呼吸。これしかないわよ。」

「うん?」

「コナン君・・・

「博士、向やつてゐるのよー救急車呼んでー。」

「コナン・・・」

「コナン君・・・」

(大丈夫だよね、コナン君・・・！)

歩美はただ、お守りを握り締めることしか出来なかつた。

れてさて・・・  
コナンの意識はいかに・・・!?

『 応急処置をしたのが不幸中の幸いでしょ。ですが・・・この気温で海に入つたことと水を大量に飲んだことが最悪の事態でしたね。』

れきほどの医師の言葉が頭から離れない。

「あーいちゃん。

昨日からなんにも食べてないでしょ？  
いろいろ買つてきたけど・・・何食べる？」

「・・・」

「んつとねえ、サンドウイッチにおにぎり・・・  
パン・・・どれがいい？」

「いらない・・・」

「でも、何か食べないと。」

蘭の言葉が次々に降りかかるてくる。

「江戸川君がこんな状況で  
のんきに食べられないわ。」

「そんなこと言つても・・・

哀ちゃんが倒れちゃつたら元子もないでしょ？」

「貴方になにがわかるのよ！-！

強い貴方に・・・私の気持ちなんてわからない！」

わかつた風な口を利かないで！…！」

ダッ

「あ、哀ちゃん…」

「江戸川君・・・なんで、なんで貴方は・・・」

哀の走った先はコナンの病室。

ララララララ

「エリス、田を覚おれなごの~」

何時になく、哀は弱弱しくコナンに話しかけていた。

S u n   F l o w e r . p a r t 1 - 2 (後編)

普段じや絶対にありえない

哀ちゃんの弱さ・・・

「蘭・・・コナン君、用覚ました?」

「ううん・・・まだ・・・」

「そつか・・・

それより、蘭は大丈夫なの?

蘭だつてあの寒さの中、海に飛び込んで・・・」

「大丈夫だよ、園子・・・

コナン君のほうがもつと辛いに決まってるもん。」

そつと呟くよつに話す蘭に園子の顔は険しくなつていぐ。

「それより、新一君にはこのこと・・・報告したの?  
確か、コナン君と遠い親戚だったよね。」

「うん。

一応、メールしたんだけど・・・留守電だつた。」

「つたく・・・あの推理オタクは・・・  
たしか、蘭が記憶喪失になつたときも居なかつたわね。」

「しょうがないよ、新ー・・・忙しいもん。」

「はあ・・・あんた、本当にいい奥さんになるよ。」

コンコン

「はい」

「は・い・ば・り・せん」

「へ、上藤君のおやぢん・・・?」

「ハント」。と言つたやうに彼は田を丸ぐるせぬ。

「阿笠博士から連絡があつたのよ。

優作はどうしても仕事が離せなくてこれなかつたけどね・・・

「そう・・・」

「新ちゃん、寝てるんだ・・・」

「水を大量に飲んだのが一番の原因らしいわ。」

「そつか。

歩美ちゃんを庇つたんだってね。

この子らしいわ。

蘭ちゃんが飛び込んで助けてくれたんでしょう？  
後でお礼言わなきやね。」

「・・・わ

「え？」

「あの人にお礼なんて・・・！

工藤君がこんな辛いときに、あの人は平然としてた・・・  
どうして、どうして笑顔で居られるの？  
私にはわからないわ。」

哀は取り乱したよつと

有希子は優しく微笑んだ。

「それが蘭ちゃんの優しさなのよ。」

「え・・・?」

「蘭ちゃん、平然として見せてたんだと想つわ。自分のせいで周りが暗くなったりするの・・・新ちゃんはいやだとわかつてゐから。」

「でも・・・」

「そこが、蘭ちゃんの強いつところよね。」

「・・・・・」

有希子はそれだけを言い残すと病室を後にした。

元気付けようと健気に頑張る彼女が羨ましくて仕方がなかつた。

こんな状況で皆が暗くなつてゐるところを

そんなの、とつくにわかつてゐる。

自分には出来ないことを、簡単にやつて見せてしまつ彼女が  
たまらなく、羨ましかつた。

そんなところを、彼が好きになつたと知つていたからこそ・・・  
尚更、羨ましかつた。

周りをひきつけてしまう彼女・・・

彼を虜にさせてしまう彼女・・・

自分とは全く正反対な彼女・・・

『太陽』と『月』

『光』と『影』

『白』と『黒』

『イルカ』と『サメ』

皆が彼女を愛し・・・

彼が彼女を愛し・・・

私がどうしても手に入れたいものを

彼女は持っている。

彼の心・・・

彼の気持ち・・・

『そこが、蘭ちゃんの強いところよね。』

彼の両親までもが

彼女の人柄の良さを理解している。

なんで・・・

なんで・・・

私と彼女は正反対なのだろう。

窓に映る夕日を眺めながら

哀は思った。

皆様・・・

風邪などは引いていないでしょうか??

どんどん冷え込んでいき  
乾燥する冬です。

加湿器・・・または近くに洗濯物を干して  
防止してくださいね。

パンパン

「入つて・・・いいかな、哀ちゃん。」

「・・・アリガト。」

蘭はちよつと、戸惑った様子で入つてくれる。

「「ナソバ、やつぱり・・・  
田原まかないね。」

「哀ちゃん、リンゴ買つてきたんだ・・・  
一緒に食べない?」

「  
ア  
・  
・  
・  
?」

「ええ・・・そうね。」

蘭はリンドウの皮を剥きながら話す。

「恋愛には超純感やうだもん。」

「せんじ、二ナン君ひて罪作りだよな。」

「え?」

「女の子の気持ち……せつと、疎くて直接言葉で伝えないと……伝わらなさそうだよね。」

「ええ……」

「だから、哀れやも伝えたほりがいいよ。」

イキナリの言葉に田を丸くさせた。

「口ナカン君のこと、好きなんですよ。」

「私が？」

「うん。」

「……貴方ここまでわかるなんてね。」

「わかるよ。」

「だって、哀れやん可憐いから。」

「……バカにしないで。」

「バカになんてしないよ。」

恋する女の子って監可憐こと思つんだよね。

だつて、せりきりしてて、その人を一途に思つて……輝いてて、一段と綺麗で可愛く見えるから。

あつ哀ちゃんは元々可愛いんだけどね。」

別に、まあこ」と言つたわけじゃないのに

慌てて修正する蘭に哀は小さく笑つた。

「あ、哀ちゃん？」

「あ・・・じめん、なさい。  
ただ・・・可愛い人だなって思つただけよ。」

「か、可愛い！？  
私が！？」

「・・・こまわいら、何言つてるのよ。」

「全つ然可愛いくないもん！」

「そんな全力で否定しなくてもいいじゃない・・・。」

「あ、あはは・・・そうだね。  
せつかく褒めてくれたんだもんね、お礼言わなきや・・・  
あ・・・ありがと。」

褒められてお礼なんて言いなれてないのか

『わいわいなくねお礼を言ひへ。

「でも・・・

哀ちゃん、自分の気持ちを語つて損はなこと思つよ・・・・

「・・・・」

穏やかに話す姿が姉と重なる。

哀もさういつままでの威圧感は嘘のよつに心が安心に満ちる。

しかし、そんな感情の揺れはすぐに崩れ落ちた。

「まあ、私の場合・・・自分からは言えなかつたけどね。  
全部、新一に言われちゃつた・・・。  
だから、哀ちゃんにこなすこと言へるよつた立場じやないんだけ  
ど・・・」

「」の言葉で。

「…………って。」

「え？」

「帰つて！  
リンクなんて入らないから、帰つてー！」

「あ、哀ちゃん？」

「お願いだから、帰つてー！」

蘭に悪気がなかつたのはわかってる。

ただ、自分より彼女を選んだ現実を叩きつけられて

急に、胸が苦しくなつただけ・・・

哀は蘭を追い出した後、その場に座り込んだ。

ら、蘭を嫌いになんてならないでくださいよー。  
嘘だよー!!

彼女はいつだって、A n goe なんですからーー!  
(今回はやう見えないかもしませんけど・・・)

ピッ

ピッ

ピッ

コナンが入院してかなりの年月が経つたような気がする。

5年も、6年も・・・

ザーッと、ザーッと長い年月・・・

過ぎてこのよつな気がする。

(バカね・・・姿は何も変わっちゃいないのこ・・・。)

びりして

彼女にあんな言い方をしてしまったんだろう。

今更ながら、後悔した。

蘭と向かひうつと・・・

もう逃げないと決めたあの日から

ベルモットに撃たれそつになつて

守ってくれた蘭。

姉と重なつてならなかつた。

何時だつて自分は彼女の味方でいようと  
ずっと思つていたのに・・・

私の中の『黒』がついめぐ。

「私と彼女の決定的な違いは・・・  
やつぱり、黒か白か・・・なのかもね。」

自分の中に黒があるかどうか・・・

それが違いだと自分で納得していた。

「いつそ・・・何もなかつたかのよう二  
生まれ変わりたいものよね・・・。」

「ねえ、工藤君・・・  
もし、私が宮野志保じゃなくただの灰原哀で  
貴方が工藤新一ではなく江戸川コナンだったら・・・  
こんなに苦しまなかつたのかしら。

私は・・・素直に貴方が好きだと・・・  
言えたと思う?

貴方がただの江戸川コナンだったら・・・

貴方は・・・貴方は・・・

「私を好きになってくれた？」



1話しか投稿できなかつたので・・・

とりあえず、金曜日に予約しておきました。

土曜日、頑張りたいと想つのですがどうですかー

何度もかのお見舞い · · ·

いつものように花瓶の水を取り替えた。

‑  
h  
•  
•  
•  
•  
•  
‑



小さく・・・

空耳かと思つてちらりと薄つすらと聞こえたのは・・・声?

反射的に寝てゐるコナンに振り返つた。

「<  
工藤君  
・  
・  
・  
!?  
」

最初に彼の瞳こうつむのは・・

ずっと思つていたのに。

彼が目を覚ましたら、蘭が最初に駆けつけた。う。

彼の瞳を最初にうつすのは彼女だ。う。

今度は目が開く。

自分。

哀は花瓶を置いてコナンに駆け寄った。

「工藤君……」



「えっと・・・誰、ですか？」

「どうかって……」



そう言つてくれるに決まつてゐる。

「冗談だよ、冗談！  
ちょっとオメーをからかつただけだよ。」

そう、彼はすぐに笑つて

何を悪ふざけ言つてゐるのだろう。

記憶喪失？

そんなわけない。

彼は、私に意地悪してるだけ。

♪、まさかの・・・!?

「えっと・・・本当に誰？」

「貴方、自分の名前は？」

おやる、おやる聞いてみた。

名前まで忘れていたら、完璧・・・

記憶喪失。





しかし、かえってきた言葉は想像してたのとは全く違つた言葉だった。

「え？」

「俺は工藤新一！」

他の誰でもねえだろ。」

そう喋った声は、彼であつて彼ではない。

哀はさう認識する。

彼の大人びた声じゃない。

本当に、子供のよつな・・・

そんな、声。

「あ、まさかオメー・・・  
蘭の友達か？」

ズキン

「どうして彼は、自分じゃなく彼女を覚えているのだろう。

「貴方、年はいくつ?」

「あ? 7歳に決まってんだろ。」

「」の言葉を聞いたときには倒れそうになつた。

「それより、お前は?」

「私・・? 私は・・・ 灰原哀。」

「灰原? 珍しい名前だな。  
あいつのことば・・・ 愛するのあ?」

「違うわ・・・ 哀しいのあ? よ。」

「かなしい? なんで・・・」

「私には、その名前がぴったりだから。」

「ふうん・・・なんか、オメー変なの。  
でも、不思議だな、全然違和感ねえの。」

ドクン

ギリッて、彼はむりりと嬉しこいとを言ひてくれるのだろうか。

そう、そんな貴方だからこそ・・・私は惹かれた・・・

まさかの・・・幼児化!?

いや、幼児化してるんだよね、うん・・・。

哀ちゃん視点続きます。

名前を聞かれたとき・・・

富野志保とこたえたほづがよかつたのかしら。

そうしたら、真正面から向き合えた？

・・・いいえ、私はどんなことをしても逃げていた。

だったら、灰原哀としてだったら・・・

「工藤君、今の状況を教えるわね。」

「ああ。」

せめて・・・

せめて、彼が工藤新一としての記憶ではなく・・・

江戸川「ナン」としての記憶でいたら・・・

工藤新一という過去を捨て去っていたら・・・

私はどんなに楽だったのだろう。

「あなたは、通り魔に銃で撃たれたの。」

「はあー…?」

「相手は全くの無差別だったから…。  
だから、たまたま貴方が狙われてしまつた。」

「どおりで痛いと思つた。」

「だから、しばらく[安静にして]頭戴。  
看病は私と博士がするから。」

「ふーん、サンキューな。哀ー。」

「あ、あい・・・?」

「あれ?違つたか?灰原哀だよな。」

「ええ。」

「哀と…・呼び捨てにされたことは一度もない。」

「いつも灰原で…・・・

『歩美ちゃん』よつは近くて『蘭』よつは遠ー・・・

呼び名。

私は、満足していた。

この呼ばれ方に満足していたのに・・・

『哀』と呼ばれてしまったら・・・

それ以上を欲張つてしまつじやない。

「・・・工藤君の、バカ。」

「へつ?ば、バカ・・・?」

「なんでもないわ。」

「なんだよ、ヘンなやつー。」

「・・・それと。

貴方が入院している間、博士と私以外は近づかない。」

「はあ?何でだよ!」

「なんでもよ。」

「えじやあ、当分友達には会えねえってことかよ。」

「ナリよ。

まあ、こつまでも子供じゃないんだから・・・  
これくらいには我慢できるわよね?」

「う・・・で、できる。」

彼の本当の一 年生が、見れたよつた気がある。

それが、私にとつて嬉しい限りだった。

S u n   F l o w e r · p a r t 1 - 8 (後書き)

しばらく、哀れやん視点にして、いきたないと思こまか。

長い間、お待たせしました。

『なに！？新一が記憶喪失じゃとー。』

「正しくは、小2から今までの記憶が抜けているよ。」

『じやが・・・なんで・・・』

「それで、博士にお願いなんだだけじか理由つけて歯を工藤君から遠ざけてくれないかしり。」

『あ、ああ・・・じやが・・・』

「じや、切るわね。」

博士の声も聞かず、私は電話をきつた。

「工藤君、今博士に電話しておいたから。」

「ああ、ありがとうな。」

「ええ・・・・」

「なあ、何でお前そんな哀しい顔してんだいよ。」

「え?」

「哀しいっていつ字が自分の名前だからか?」

心底心配そうに私に尋ねてきた。

「私、そんなに哀しい顔をしてたかしら?」

「してないー。」

「・・・私は、元々こういう人なのよ。」

「 さうなのか？」

「ええ。」

「 それにしてもさ、初対面なのに俺に看病してくれて  
サンキュー。」

「 ・・工藤君、もう一つ付けたしするとね・・・  
あなたは撃たれた衝撃で一部記憶を失ってるのよ。」

一部つていうか・・・

大分失つてゐるような気がするけど・・・

一先ず彼を興奮させないよつと言い方を考える。

「まあ、そんなこいつたのうなって思つた。」

「へえ。」

「……へえ、って……驚かないの?」

彼は昔から勘がよかつたのかしら？

「で、どこからの記憶がねえんだよ。」

全部、言つてしまつたほうがいいのかしら・・・。

そつひのまつが、私としては楽かもしれない・・・。



たまには、私も楽になつていいかしら？

次回もよろしくです！

本当のことと言ってしまおうか・・・

すうつと鼻を吸つた。

ガラッ

その途端に博士が入つてきた。

「おっ、博士じゃねーか！」

「あ、ああ・・・」

「・・なんか老けたな。」

「ほ、ほっとけ！」

博士の登場に、私は冷静に考えてみた。

今、彼に全て話して何になるんだ？

どうでもならない」とへりへり、わかってるはずなのよ。

「もういや、哀！」

「え？」

「あ、あい・・・？」

「彼、私のことをもう呼ぶようになったのよ。」

「俺・・・記憶がある前はお前のことなんて言つてたんだ？」

「・・・は、は・・・・・」

彼に、言つたらもう”哀”と呼んでくれないのかしい。

少し、うれしかったこの感情はもう、返つてこないのかしい。

「灰原。」

「へえ。

蘭と園子はしたの名前で言つてゐるの。  
なんでお前だけは苗字なんだろうな。」

「ああ？」

それは・・・私はしばらく後に貴方と出会つたからよ。

「それで？」

俺はどれくらい記憶をなくしてるんだ？」

「・・・」

『彼に言つてなんになる？』

『でも、言つたほうがいいかもしない。』

『言つたら、彼はまた彼女の元にいつてしまふかもよ？』

『だからと言つて、嘘をつくわけにはいけない。』

『通り魔の時点では嘘をついたことになるんだから、  
今更積み重ねても、問題はないでしょ？』

私の中で意見が分かれる。

「哀くん？」

「・・・なんでもないわ。

貴方は・・・貴方はね・・・

言つたほうがいい？

どうしたらしい？

『江戸川コナンのこと、言つたら彼女への重いが更に高まるかもよ  
?』

最後のこの一言が・・・

私の中のこの一言が・・・

私の決心を固めた。

「貴方はね・・・

約一ヶ月程度の記憶を忘れてるよ。

私は、その中旬に転校してきたから。」

「へえ。」

「私への呼び名が灰原なのは、ただ単に後から仲良くなつたつてだけ。」

「そつか。

一ヶ月なら問題ねえな。」

「あ、哀くん・・・あれでいいのか?」

「ええ、いいのよ。

彼には通り魔に刺された衝撃で一時的に記憶をなくしてゐる。つて言つてるしね。」

私は生まれたときから黒の心を持つていた。

真っ黒な闇がいつも私を包んでた。

黒は、何を混ぜても黒にしかならない。

白に戻ることができないなら・・・

とここん黒に染めてしまつと・・・

私の中の悪魔が囁いていた。



次回もよろしくです

Sun Flower · part 21 (前編)

咲くやん視線落ついでやー。

「あ、哀ちゃん！」

「ナン君が記憶喪失だって本当ー!？」

なぜ、蘭が知ってるんだろうと驚いた表情で顔を見る。

「博士ね・・・」

途端に呆れた表情と声。

「それで、目を覚ましたってことでしょ?  
今から会えないかな?」

「無理ね。」

「え？」

「彼は記憶を失ってる。

私と博士以外の人物は皆忘れ去ってるのよ。」

「じゃあ、私も・・・？」

「ええ。」

しらつとした表情で蘭を見上げる。

「医者が言つには、大事な部分しか覚えてないみたい。」

「大事な部分・・・？」

「ええ。

彼が余分と判断した部分は全て忘れてるらしいわ。」

かすかに蘭の肩が揺れたのを毫は見逃さなかつた。

そして、一発で見抜く。

(彼女は間違いなく、工藤君の正体に勘付いている・・・。)

「そ・・つか、コナン君にとつて哀ちゃんは大事な人だもんね。」

「え・・・？」

「2人、いつもコソコソ話して・・・

なんか親密そうな雰囲気だしね。しょうがないよね。」

「・・・そうね。」

「ねえ、一目見るだけでも駄目?」

「彼を混乱させるだけよ。」

「・・・そつか。

じゃあ、この花束。渡してくれる?」

「わかったわ。」

キレイな花束を受け取る。



ふて腐れたよつて息をまく。

「なんだって言われてもしょうがないのよ。」

「はあー!?

「なんだよ、それー!」

「平氣!」

「なるべく早く退院して、既に会いたいしょー。」

「・・・退院しても、しばらく家で安静にしてなきゃいけないのよ。」

「

「あつ、哀ー。」

「何しに行つてたんだよ。」

「ちょっと呼ばれただけ。」

「それより、体調は大丈夫なの?」

「クスッ」

「んだよ・・・」

「いいえ。

意外と子供だったんだな、って思つただけよ。」

（彼が小1の頃は、本当に子供だったのね・・・）

「うぬせーな・・・」

あ・・・」の後ビリなが・・・!?

「私、貴方と居ると浄化された気分に浸られたわ。」

「は？」

「黒い私だけど・・・  
本氣で白に戻れるって思つてた。」

「な、何いつてんだ？」

「ねえ、蘭さんが好き?」



哀が言葉を発すると、一気に顔を赤くする。

「ナン・・・いや、新一。

「なつ、イキナリなんだよ！」

「いきなりじゃないわよ。

ただ、気になつただけ。ねえ、どうなの？」

「す、好きなんかじゃ・・・」

「そりやつていつも、隠してたの？」

「隠すつてなあ！

大体、あいつとはただの幼馴染で・・・」

お決まりの言葉がかえつてくることを、哀は知つている。

「じゃあ・・・」

「？」



「私は好き？」

だんだん赤みが消えていくことに少し、胸が痛む。

「えー？」  
「彼女を幼馴染だと思つてるなら、私はなんだと思つてるわけ？」  
「なんで、そんな」と聞くんだよ。」「

「別に。  
ただ聞きたくなつただけよ。」

「哀は、良い奴だと思つ。」

「それだけ？」

「力になつてくれるし……」

「・・・・・」

「俺、哀は好きだ。」

”好き”といつ単語に素直に喜んでもいいのに

喜べない自分がいる。

哀は静かに声をだした。

「だけど……蘭さんとは違う。……でしょ？」



「ああ。  
」

(彼は、わかつてゐるのかしら。  
自分の一言が、私の着々と黒に染めてこぬ」とを・・・)



次回もよろしくです！

「ねえ、哀ちゃん。  
これ・・・「ナン君がすきだったものなの。  
渡してくれる?」

「・・・病院食以外のもの食べたら病院側に失礼だとは思わないの  
?」

「あ、そ・・・そうだね。  
ごめん。全然気が利かなくて。」

「別に・・・」

「ねえ、哀ちゃん。怒つてる?」

「怒つてるとよつて見えたから。」

「え?」

「余計なお世話よ。」

シンヒしてやつぱを向いた。

「ノル、アキラね・・・」

「ねえ。」

「なに?」

「私に、工藤君を渡してくれない？」

「え？」

（ほらね・・・彼女はどうして私が工藤君を知ってるのか  
聞かない。  
やっぱり、彼の正体を、見抜いているのね。）

「どうして、私に聞くの？」

「だって、彼に告白されたんでしょ」

「そ、そうだけど・・・

哀ちゃんと新一は年が違うからじゃない？」

「じゃあ・・・江戸川君な感じわけ？」

とこう状態。

唐突な言葉に蘭はあいた口がふさがらない。

「江戸川君なら……私はもうつていいの？」

「どうして……」

「どうして私が彼の正体を知つてゐなかつてこうのは  
どうでもいいのよ。」

「哀ちゃん……」

「ねえ、貴方はいつから氣づいてたの？  
少なくとも、最近までは氣づいていなかつたはずよ。」

(今更彼の正体をバラすことなんて、ためらいはなかつた。  
彼女に危害が加わるなんて、どうでもよかつた。)

「そうだね……

たまたま病室の前に来たとき、博士が新一って言つてたのが聞こ  
えたから。

そのときは慌てて走っちゃつたけど。」「

「……」

「でもね、哀ちゃん。」

私・・・哀ちゃんの恋は応援してるよ。  
新一は渡せないけどね。」

感想お待ちしています

「……そうね、私もこの気持ちを簡単にはがすことも忘れ去ることもできないわ。」

「でしょ？」

「でも、今彼の一一番近くにいるのは私よ。」

「そうだね……。」

「これから、彼が私を見てくれるよう努力するつもりよ。だからお願ひ。

私の邪魔をしないで。」

「……私の好きな人が他の人を好きになっちゃうかもしけないのに、黙つてなんかいられないよ。」

正論を吐く蘭に哀はため息をついて、もらした。

「彼、記憶喪失だつて言つたでしょ？」

「うん。」

「彼は工藤新一の小一の記憶しかないのよ。」

「えー？」

「それからの記憶がすっぽり抜けてるの。

勿論・・・高校生になったことも、江戸川コナンになったことも・

貴方に告白したことも。」

蘭の心に、ずつしりと哀の言葉がのしかかる。

「工藤君は私を貴方の友達だと勘違いしてゐるわ。  
灰原じゃなくて、哀と呼んでくれるの。」

「でも哀ちゃん・・・

哀ちゃんと博士の記憶しかないつて言つてたよね?  
あれは、嘘?」

「ええ・・・

そうしたら、諦めてくれると思つて。」

「・・・」

自分らしくない言動だと、哀は自分自身わかつていた。

わかつていながらも、”恋”というのはこんなにも人格を変えてしまったのか。

と冷静に考えてしまひ。

「私、小さい頃から何のために自分がここに存在するのかわからなかつた。

両親も居なかつたし、唯一の助け舟である姉は殺されて・・・自分の生きる道を失つた、幸せなんて感じたこともなかつた。でも！今はものすごく幸せなの。」

「哀ちゃん・・・」

「この幸せを、壊したくない。

だから、貴方が邪魔なの・・・

貴方なら、ほつとけばいろんな男が寄つてくるでしょ？

貴方を大事してくれる人はたくさんいるでしょ？

貴方は誰にでも愛されるでしょ？」

知らぬうちに、涙が溢れてくる。

「私には、私には彼しかいないの！」

工藤君しか助け舟がないの。

工藤君しか私を全て受け止めてくれる人はいないの！」

全て言い切ると「はあ、はあ。」と呼吸する。

「哀ー。」

「いや、コナン君・・・」

「工藤君ー。」

新一は小さな体で2人の元へ行く。

「哀? 何泣いてんだ?」

「別に……何でもないわ。」

「? · · · · あれ、蘭に似てる · · · 。」

「し、新一 · · · ホントに記憶を · · · 」

「何で俺の名前知つてんだよ。  
蘭には姉さんなんていねえし · · · いとこで蘭に似てるやつなん  
て聞いたことない · · ·  
すんげー似てる。」

「さ、工藤君。」

お姉さんはもう帰るとこいなの。  
引き止めたら悪いわ。  
私たちは病室に戻りましょう。」

「あ、ああ · · · 」

やつ血つて歩き出す一人に蘭は呼び止める。

「哀ちゃんー。」

「・・・ひとり歩き、帰つてないんだい。」

冷たく、哀は言い放った。

S u n   F l o w e r · p a r t 2 4 ( 後書き )

これから的发展・・・  
予想できませんね。

なにしろ、私もですから。（おこおい・・・。

「なあ、哀。

あの人誰だよ。」

「別に。

ただの知り合いよ。」

「なんだか蘭に似てたよな。」

「そう?

私はそうは思わないわ。」

「・・・なんか、怒つてるよな。」

「怒つてないわ。」

「そりゃ?」

怒つてない。

ただ・・・いろんなときも蘭を忘れていないことに

傷ついただけ。

いつだつてクールな哀も

ただの女の方。

傷ついてもあれば、泣くことも、怒ることもある。

恋かるじとも。

(貴方の両親が来ないのは、伝えてないからよ。

「いや、こくらしきくても息子が入院しているのに一度もこねえにもどりつかと思つだろ?」

「え?」

「……父さんと母さん……なんか書いたか?」

「ええ。わかつたわ。」

「今度ここに来るとお推理小説もつて来てくれよ。」

「あ、そうだ。」

「なりじこねえ。」

「わあつむつてー。」

「……しづらへ我慢しなや。」

「あー、早くみんなにあこへーなあ。」

工藤君・・・

「そうね、会いたいって言つてたわ。  
でも、私と博士が止めたのよ。」

「なんだ?..」

「今は安静第一。」

あひらも忙しいから、私たちが看病することにしたの。」

「ふーん。」

「・・・寂しいの?」

「なつなわけなねーだろーー!」

「寂しいのね。」

「だから、ちばーつてー!」

「はーはー。」

「つーオメーのやうにう言い方、ムカつべ。」

「記憶があるときも、貴方にそう言われたわ。」

「んだよ、もうちょっと可愛べしてつやあいこのこと。」

「それも、言われたわ。

まあ、私には褒め言葉にしか聞こえないけどね？」

この時は・・・

今までの灰原哀に戻れた。

やつぱり、

自分には彼が必要だと、哀は思った。

どうしたんだよ、お前！

「私、蘭さんになりたいわ。」

『せせりと漏りした言葉だった。

「はあ？

「だったら、空手でも始めたらいこうんじやねえか？」

「・・・・・ナウジシャなぐて・・・・」

「じゅあ、料理でも習えば・・・・・」

「だから、違うって聞ひしるでしょ。」

「だつたら、何だつて言ひんだよ。」

ちよつと、イラついたような表情で  
哀を見る。

「私は、毛利蘭って言う人になりたいの。」

素直に口に出してみる。

彼の反応はどんな風だろつか。

と少し期待した目で見る。



「それは無理だろ。」

帰ってきたのは

デリカシーも気配りのかけらもない

一瞬。

段々言葉が投げやりになつてくる。

「あのなあ・・・・

「「あんなさい?  
デリカシーのない探偵さん。」

「うわっ  
イキナリ投げてくんじゃねえよークッションを。」

「んなの」と、最初からわかつてゐわよー。」

「はいはい。  
蘭さん大好きさんには何言つても通じないことくらい  
わかつてゐるわよ。」

自分で言つて心が痛くなるのを

感じた哀だった。

少しでも、早く元の哀ちゃんに  
戻したいんですね~。

ほんやん語りです。

私は、どうしたら彼の一一番になれるのだろう。

こんなこと、考えたことなかった。

誰かにとつて、自分が特別な存在でありたい。

なんて、現抜かすようなこと、思つたこともなかつた。

”私を好きになつてほしい。  
私がだけを見ていてほしい。

”

恋に溺れてしまったのかじらっ。

私は、工藤君」「工藤新一」になつてほしかったわけじゃない。

「江戸川コナン」になつてほしかったの。

全て、全て・・・リセットしてほしかった。

そして、私もリセットしたかった。

最悪な形であつたりしないで・・・

お互い、ただの小学一年生として、純粋に恋をしたかった。

私の恋は  
”黒い”

「はあ？ 誰だ、それ。  
江戸川君・・・  
」

私、本当に・・・まだ黒い血が流れてたみたい。

血覚してたけど、これほどのことはね。

彼は、全て本家のことを詰めきと迷ったとき、

私は想定した。

その時はまだ、良心があつたんだと思つ。

「なあ、ルのとわホーメズの話しあしたんだけど、  
そしたう蘭のやつ、起こつてよ・・・」

「ルのジース！

5歳のとき、蘭が「おひつやつなんだけど・・・」

「なあ、哀。

蘭・・・・泣いてるか？

あいつ、本当に辛いとき泣かねえんだよ。」

彼から出でてくる言葉は、  
”蘭”

一度も、私の名前は出でたりしない。

彼に、悪気がないことくらい……

知ってるけど。

やつぱり、堪えるわね。

わあ。次回はやいづなるのでしょーつか！？

恋ちやんの心・・・

彼から”蘭”という単語が出てくるたび・・・

私の心が深く傷つくのがわかる。

ビーハー、ビーハー・・・

私は彼の一一番になれないのだろう。

ビーハー、ビーハー・・・

彼女より上にいけないのだわい。

育ちが違うから?

私は、黒だから?

彼女は天使だから?

私は、可愛くないから?

ハーフだから?

それでも彼は・・・私を守ってくれると黙って呟いた。

少なくとも・・・江戸川コナンとして・・・

彼は、私を守ってくれるといった。

私は、貴方に心を取られてばかり。

なのに、どうして貴方の心を私にくれないの？

”彼に本当のこと、言っちゃえれば？”

” だめよ…そんなことしたら・・・ ”

” 私と恋人同士だったのよ。

蘭には、新しい恋人ができるのよ  
つて、嘘ついちゃつてもいいんじゃない？”

” ちょっと待つてよ！

貴方はそこまでして、彼の心がほしいの？  
本当に黒に染まっちゃうわよ？”

” もともと黒なんだから、今更黒になつてもどうついてないわよ。

” だからつたねえ・・・ ”

まだ良心のある私と

完全に黒に染まつた私の

口論が頭の中で繰り広げられる。

”現に、昨日話そうとしたじゃない！  
本当のことを”

”あれは！一時的な迷いよ！  
本心なんかじゃないわ。”

やがて、あの時点では・・・本心なんかじゃない。

今だつて、心の中では『まだ良心のある私』に味方をしていく。

だけど、『完全に黒に染まつた私』が言った次の言葉は・・・

私の決心を固める。

『完全に黒に染まつた私』が私の決心を固めるのはもう・・・

2回目だった。

” 悩みたいなら悩んでもいいけど・・・

悩んでいる間に、彼女の元に好意が強まつたらどうするの？  
彼はまだ、小1の記憶しかないの。

彼女に告白したことも記憶から除外されてるのよ？  
こんなチャンス・・・ないんじゃない？”

次回もよろしくです！！

「『みんなさいね・・・貴方を傷つけまい』としたことだったけど・・・

哀は、不適な笑みをうかべる。

驚いたように口を見開く。

「私、貴方に嘘をついていたの。」

「ん?」

「ねえ、工藤君。」

やつぱり、本当のこととは言つた方がいいと思つて。

「なんだよ、本当のことって。」

「貴方はね、工藤新一じゃなく、江戸川コナンなのよ。」

「はあ？」

何を言つてゐるんだと

バカじやねえかと

新一は哀を見る。

「嘘じやないわ。

貴方はね、覚えていふ記憶から、高校2年生までの記憶が  
すっぽりと抜けてしまつてゐるよ。」

「う、ちょっと待てよ。」

「高校2年生って、俺のこの小さな体は・・・」

「だから、言つたでしょ。」

「貴方は、江戸川コナンとして生まれ変わったのよ。」

「は、話しがみえねえんだけど・・・」

「全て話しましょつか?」

新一は恐る恐る首を縦に振つた。

すみません

勿体ぶりますww

「貴方はね、高校生探偵として活躍してるのよ。」

「俺が？」

「ええ。

でも、ある日を境に貴方は身を隠さなければならなかった。」

「隠すつて・・・」

「蘭さんの空手の都大会優勝祝いにトロピカルランドへと遊びに行つたのよ。

貴方たち二人はね。

そこで、怪しい取引現場を目撃した。

高校生探偵としての貴方は、好奇心で近づいたのね、彼らに・・・

哀はゆつくつと病室を往復しながら話す。

「しかし、それが仇となつてしまつた・・・」

「ゴクッ

新一の喉がなる

「見つかつたのよ。取引現場をしている仲間にね・・・」

「それで・・・俺は・・・」

「殴られて、ある薬を飲まされたわ。

名称は・・・APT-X 4868。毒薬よ。」

「ど、毒薬ー?」

「ええ・・・でも、運が良いことに貴方は死なずに幼児化した・・・

ちなみに、その薬は私が作ったの。

私もね、貴方と同じように薬を飲んで幼児化したのよ・・・

「・・・」

「ハツキリ言つてしまえば、私は・・・殺人組織の一員だつた。つてわけ。

その組織を貴方はつぶすため、名前を変えて過ぐしてたのよ。貴方が記憶を無くす前も江戸川コナンとして、温泉旅行に行つたところなのよ。」

「じゃあ・・・あの、蘭に似た人は・・・」

「そうみよ。

正真正銘、貴方の幼馴染。毛利蘭。」

「俺のこと、コナン君つて言つてたよな・・・」

「貴方はね、招待を偽つてたの。」

「蘭にも?」

「ええ。」

「何で?」

「そうね・・・彼女は貴方にとってそういう存在だったからじゃない?」

「そんなことねえ!」

「俺は・・・俺は・・・俺にとつてあいつは・・・」

「だったら、なぜ言わなかつたのかしらね?」

「彼女に・・・自分の正体を。」

まあ、外に漏れてしまえば、彼らに見つかり。すぐに殺されてしまう心配もあつたし……

貴方は彼女のこと信頼してなかつたんじやない?」

「蘭は、口が柔らかい女じやねえよ……」

「貴方がなんと言おうと、言わなかつたことは事実。」

新一は口を閉ざす。

「つまり……私たち2人は同じ穴のムジナだつた、つてわけ。」

「俺は……殺人犯のお前とは……」

「ちゃんと受け止めてくれたわよ?」

「私を、彼らから守つてくれると言つてくれたくらいね。」

「これは事実。」

「まあ、どう受け止めるかどうか貴方次第だけど……  
今話したことは全て事実。

ちなみに、貴方と私の正体を知つてるのは  
博士、西の高校生探偵、貴方の両親、私の死んでしまった姉」

次々と名前を出していく。

「貴方が聞いたことのない名前だと思った人物は  
小1以後に出会った人物だから、気にしないで?  
それと……一時だつたとはいえ、貴方に嘘についてたこと  
謝るわ。ごめんなさい……。  
それじゃ、また明日来るから。」

S u n   F l o w e r · p a r t 3 0 ( 後編 )

あ~~~~~

とつとう、全て話してしまったーー！

「ン」

ガラッ

「よく眠れた？」

「哀か・・・」

「私で残念でした。」

「わかった意味じゃねーよ。」

「やうへ。」

哀は持つてきた果物をむき始める。

「なあ・・・俺さ、江戸川コナンといじりどんな風だった?」

「別に。

普通の子供だったわよ。」

「ふーん・・・

「そんなんに蘭さんで会いたい?」

「そんなんじゃねーよ。」

「あら、照れないのね。」

「あのなあ、君にはかなり衝撃的なこと聞かされてんだぞ?  
照れたりなんかする余裕もねえよ・・・」

「・・・せばば、話さないほうが良かつたのかしら?」

「いや、話してくれたほうが助かったよ。」

「そりゃ。」

彼を混乱させたりしてこのことに心が痛んだが

内心、喜んでいる自分がいることに

恐ろしさを感じた。

全てを吐ききった後、『まだ良心がある私』が戻ってきた。

ひどく罪悪感につつまれて・・・

つらかった。



ガコンツ

自動販売機の前で哀は呆然と立っていた。

押した「コーヒー」をゆりくつと取る。

そしてまた、ゆりくつと椅子に座った。

「・・・ほんと、私ってバカよね。」

「・・・哀、ちゃん？」

後ろを振り返るとそこには蘭がいた。

「蘭さん・・・」

「何かあつた？」

蘭はゆりくつと歩み寄りて哀の隣に座った。

「・・・私、あなたに酷いこと言つたのよ?」

「うん。」

「傷つけたわ・・・」

「うん。」

「なのに、なんで笑えるの?」

「・・・哀ちゃんは、私の友達だから。」

「  
え?  
」



「私にとつて、哀ちゃんは・・・かけがえのない友達よ。」

「この人は、何を言つてるんだろう。」

哀にとって、蘭の言葉は衝撃すぎて異国の言葉にしか聞こえない。

「自分が恐ろしくなるくらい、新一が好きなんだよね。  
すごく・・・情熱的じゃない。」

そんな子を嫌いになるほど、私は冷たい人間じゃないよ。」

「・・・蘭、さん・・・」

「ね?」

「・・・私は黒い人間よ。白のあなたが・・・  
天使のようなあなたが、悪魔な私を・・・?」

「哀ちゃん!」

急に大声を出す蘭に、一瞬ビクリと肩を動かす。

「哀ちゃんは、悪魔なんかじゃない！  
私も・・・天使なんかじゃないよ。」

「・・・あなたは、天使よ。」

「うん。

私だつてね、「ナン君となつた新一が哀ちゃんに信頼してゐる」と  
見ると・・・  
すごく嫉妬しちゃうもん。  
私だつて、黒いところくらいはあるんだから。」

「私に、工藤君が信頼してゐる？」

「してるわよ。

だつて、新一・・・哀ちゃんの傍にいるでしょ？」

「え？」

「新一ね、心を開かないとあんな無邪気に笑つたりしないの。

いつも・・・心に壁つくつて・・・

だから、哀ちゃんは新一に信頼されてる。」

「私が・・・」

心の中の、糸が切れたような感じがした。

そろそろ終わりかなー・・・

あんまり、バトルって感じがしませんでしたね。  
すみません。

蘭と哀ちゃんのバトルは

あんまり過激で熱いものじゃないと思つて・・・  
冷ややかに、静かなバトルなんじゃないかなつて  
で、最後はしつとりと終わるだらうな・・・

つて勝手に解釈してしまつてます・・・^\_^；

「蘭さん。」

「何?」

「私ね、上藤君に本郷のことを話したのよ。」

「え?」

「あなたは、高校一年生までの記憶がないんだって。黒の組織のこと……」

「……黒の組織って何のこと?」

そう、蘭は新一の正体がわかつただけで

成り行きまでは話していない。

「 A P T X  
4 8 6 9 。

「工藤君は、貴方と別れたあの日。  
毒薬を飲まされて体が縮んだのよ。」  
「え？・・・え？」

殺人組織の科学者作った神秘的な毒薬。

まだ未完成だったから、工藤君は幼児化だけですんだ。  
その科学者って言うのが、私。」

大きく目を見開く。

「哀ちゃん、貴方も？」

「ええ。私も幼児化したわ。

本名は宮野志保。お姉ちゃんが殺されたことがきっかけで私は  
組織の裏切り者となつた……」

「哀ちゃん、ほかに身内は？」

「いなーいわ……両親も組織の一員だつたけれど事故で……」

目を伏せた哀にそつと優しい温かみが包み込んだ。

「私は、抱きしめることしかできないけど……」

「蘭さん？」

「そつか……そうだったんだ……  
哀ちゃんが一番つらかったね。やつぱり……  
私、何にもわかつてなかつた。  
でもね、哀ちゃん……」

貴方が組織の一員となつていたのは仕方の無いことだつたのよ。  
だつて、両親が一員だつたんでしょ？  
子供がならないなんて、おかしいじゃない。」「

「だけど……」

「哀ちゃんが悪いんじゃない。」「

「でも、私は毒薬を作つたわ。  
作つてるなんて思わなかつたけど……  
あの組織の一員である」と、お姉ちゃんが殺されるまで  
罪悪感なんてなかつた……」

「それは……それはね、哀ちゃん。」



「洗脳だよ。」





「洗脳？」

「そう、洗脳。  
きっと・・・殺人組織だから薄暗い窓もないような基地だったんじゃない？」

「そんなところは、閉じ込められた状態だったんですね？」

「ええ・・・。」

「それに、子供ときからその状態だったのなら・・・。  
何も感じなくて当然だよ。」  
洗脳されたの、これが当たり前だつて。  
でも、お姉さんが殺されてから、哀ちゃんの洗脳が解かれた・・・。」

・

「解かれた？」

「そうだよ・・・。  
だって、哀ちゃんだって殺すのはおかしい、って思つたはず。」

お姉ちゃんだったから余計だったかもしれないけど……理由もなく殺すなんておかしい、って思ったよね？」

確かに、そうだった。

姉が殺されて、なんで殺されたのか理由を何度も問い合わせた。

たつた一人の肉親。

なぜ、理由も話してくれないのだろうと……

「哀ちゃんは黒に染まつてなんかいないよ。前黒いついたね。」

「……」

「哀ちゃんは黒に染まつてなんかいないよ。」

「え？」

「お姉ちゃんの死を、哀ちゃんは泣いたと思つ。たとえ肉親でも……人のために泣ける人はす」「こよ。」

「それを言つなら、貴方だつて……」

「私は、ぐだらない」とでもすぐ泣いちゃうから……。

涙があふれる。

涙だけがひたすら、あふれる。

「哀ちゃんが本当に黒に染まついたら……。  
歩美ちゃんたちとあんなふうに笑つたりしてないよ。  
もつと、自分に自身をもつて。

哀ちゃんは悪魔なんかじゃない。

歩美ちゃんたちも、私たちも、みんな……。

哀ちゃんが居てよかつたって思つてるよ。

それだけで、哀ちゃんは十分天使なんだから。」

「蘭さん……」

「私は、哀ちゃんが大好き。」

「う・・・せん・・・」

「ね？」

彼は驚いて叫びなづいた。

そろそろですかねえ

最終回

。 。 。 。 。 。 。 。

ガラッ

「工藤君・・・」

「どこに行つてたつて・・・  
どうしたんだよ、その田ーーー。」

「別に。気にしないで。」

腫れた田を隠すよつて

話しそうした。

「それよりね、貴方に会わせたい人がいるのよ。」

「会わせたい人？」

「ええ。

・・・入つて、くれる？」

ガラッ



「・・・・蘭？」

「そうよ。

正真正銘、貴方の幼馴染・・・毛利蘭さん。」

「まだ記憶がないんだ。新一・・・」

「ええ。」

「・・・やつぱり俺、高校2年生なつてたんだな。」

「そうよ。

キザでカツコつけな、高校生探偵なんだから。平成のホームズって言われちゃって・・・  
新一は、憧れのホームズに近づいてるよ。」

「俺が?」

「うん。

まあ、私から見れば・・・大バカ推理之介だけどね?」

「お、大バカ・・・?」

ひくつと

頬がつる。

「今にも増してホームズ好きが深まっちゃったのよ。推理オタクにもほどがあるわ・・・。」

「お前なあ・・・。」

「でも、ほんと小さい姿で蘭つて言われると小さじこりに戻ったみたいだよね。」

蘭がにこっと笑うと

新一はフツと笑みを消した。

「新一？」

「・・・俺、お前に正体隠してたんだよな・・・なんで言わなかつたんだろうな。」

「それは・・・。」

「？」

「それは・・・それは・・・  
蘭さんに危険があつたからよ。」

「危険？」

「そう。

もし、工藤君の正体が組織にバレたら  
周りの人にも危害が加わる。  
だから、貴方は一番・・・一番大切な彼女には言わなかつたの。」

哀の言葉に新一は顔を赤くさせた

「一番大切って・・・

別に、んなじやねえよ・・・。」

と反論する。

「クスッ

ほーんと、おつかしい。

そりやつて拗ねたような言い方。

新一らしくよねえ。」

「お前だつて似たようなもんじゃねえか。」

「・・・やつ蘭さんは反応しなくなつたのよ。」

「え?」

次の言葉は

新一にとつて、衝撃的なものだつた。



「貴方から告白されたんだから。  
」



つてことで、

次回もよろしくです！

「はああああ！？」

自分が痴戯したこと

驚いているのか

または

恥ずかしく思っているのか

それは定かではないが・・・

「だから、告白したのよ?・高校生の貴方は。」

「俺がー?」

「そう。

まあ、無理もないわ。

貴方の記憶は今、小学校一年生で閉ざされたいるんだから。」

「俺・・が?」

「何回聞いてるのよ。

間違いなく貴方は蘭さんだ

「哀ちゃん・・・」

「何?」

「あんまり告白を連呼しないで・・・

私まで恥ずかしくなつてしまひやつた・・・」

「貴方が恥ずかしがつてどうするのよ。

私は今、上藤君に辱めを吸収せよといつておるのよ。」

「辱めてなんだよー!」

「辱めは辱めよ。

今の状況では、告白できないでいる貴方が

高校生では告白できたっていう実績を今教えてあげているのに。」

「だから、連呼は・・・」

「実績つてなあ・・・

なんだよそれ。運動とかじやねえんだぞ?」「

ମୁଦ୍ରଣ ପାତା

言葉と言葉の約束みたいなものだもの。  
体を動かしながら告白するバカなんている?」

「あー！」

「...なくてはいけない」

ガヤガヤと

あひせひひじせひあ

会話が繰り広げられる。

「つるわこわアホ！！  
耳がいとーなつてゐやないかいー。」

「・・・は、服部君ー。」

「服部？」

「・・・一応言ひたび、  
貴方の声のほうがつるわこわよ。」

「相変わらずあつついなあ、姉ちゃん。」

「服部君、なんでこじこじ？」

新一が入院したこと、言つたの？

「私は言つてないわよ。」

「じいさんに聞いたんや。」

「・・・また博士？」

「かなりおしゃべりなのね。」

「工藤が入院したってこと知つていつそいで來たんやで。

なんや、元氣やつやないか。」

「新一、結構悪運強いから。」

「あいつや……ひたすら。」

テンポが崩れたように平次は汗をかく。

そして、急いで口をふきこだ。

「ね、姉ちゃん……今の聞いた？」

「何を?」

「あ、わざわざのせやな、藤原のせや……」

「へへ。」

「わづー……それや、それー。」

「……毎回つかつてる言ひ逃れよ。」

蘭さん、気にしないで。」

「う、うん・・・

「気にしないでってなあ！

工藤の正体がバレたら、姉ちゃんにも・・・

「危害が加わる。

そんなこと、もう知ってるわよ。

彼女は。」

「へ？

じ、じゃあ、工藤はどうどうバリしたんか？」

「いいえ。

彼女がただ気づいただけ。

詳しい内容は、私から話したの。」

「なんでまた姉ちゃんが・・・

「まあ、私は話すようなタイプじゃないしね。  
不思議に思うのも無理はないわ。

・・・でも、今の工藤君の状況を知つたら  
貴方だつて話したくなるわよ。」

「え？」

「新一、記憶喪失なの。」

「ソソソ話していた2人の後ろから

今までの内容を聞いていたかのように蘭は言つ。

「き、記憶喪失う！？」

「だから貴方の声、大きいのよ。」

「正しくは、小学校一年生から今までの記憶までだけだ。」

「・・・ああ！」

思い出した。俺の正体を知つてる人のうちの一人だ！」

「え？」

「私が話したのよ。

工藤君の正体を知つてる人をね。

それで、貴方の名前を出して・・・・・

「それで・・・・

「彼は服部平次。

貴方とは東の工藤・西の服部って呼ばれてた  
ライバル関係みたいなものよ。」

「へえ。」

「ほ、ほんまに記憶喪失なんやなあ・・・」

「「」ことで嘘をついても得なことないでしょ」。

「や、そりやうやな。

・・・な、なあ姉ひやん。ちつこい姉ひやん今まで以上に  
毒舌に磨きいれて、どないしたんや?」

「服部君・・・元通りになつたんだよ。娘ちゃんせ。」

「?」

「「」こと娘ひやん、可愛いでしょ?」

「まあ~」

平次はしばらく頭にマークを浮かべていた。

S u n   F l o w e r · p a r t 3 4 ( 後書き )

次回もよろしくお願ひします！！

蘭は一旦家に戻つて、アルバムを持ってきた。

新一の記憶を取り戻すために。

「なんか、パワフルになつてねーか？」

「これが・・・園子。」

「そりやそつよ。

貴方が止まつた時間は動き続けているんだから。」

「だよな。」

「これは、中学校の入学式。」

「帝丹中の制服だ・・・」

「新一はね、3年間ずっと一年トップだったのよ。  
憎たらしくらいにね。」

「ほ〜? そん時から、嫌味な奴やつたんやな?」

「嫌味な奴つてな・・これは?」

「それは、帝丹高校の入学式。  
桜の木で撮るつって言つたのはおば様だからね。」

「だろーな。」

「これ・・・蘭さんの都大会優勝のときの『真よね』  
『うん。』

「なんで工藤が持つて・・・」

「新一のカメラで撮つたから。  
だから、持つてたんだと思ひ。」

「私には別の意味があると思つけどね？」

「俺もそつ思つわ・・・」

「え？ なんで？」

「別に・・・記憶が戻つたら本人に聞くことね。」

「そうやつ。」

「？」

蘭は何度も聞いただそうとしたが

2人は笑つたままで何も答えない。

「・・・もう。あ、これはね。

高校の劇の”シャツフル・ロマンス”」

「園子さんが脚本の劇よ。」

「なんか、超ラブストーリーだったりして。」

「あたり！ そのとおり。

新一に与えられた役はかなりキザなんだから。」

「まあ。その時にはすでに江戸川君だったから台詞も覚えてなかつたけど?」

「そうそう。いきなり抱きしめて、これからどう進めばいいかわからなかつたもん。」

「抱きしめる!-?」

「・・・今の貴方には想像できない行為ね。」

思って出してくれるでしょうか??

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0689y/>

冬の向日葵

2012年1月10日19時52分発行